

地域メディア活動での国際交流の試み

藤田 智子 加藤 将明 中村 雅子

本研究では、地域メディア活動（つづきジュニア編集局）の一環として、横浜市在住の子どもたちと、アメリカニューヨーク州レオニア地区に住む日系人を含む子どもたちの間で SNS サイトを通じた国際交流を実施し、今後のメディアを用いた交流のあり方について考察した。参与観察や実際の利用のログの分析から、日本の子どもたちについて、(1) 交流活動はもともと高かった国際関心をさらに高めた (2) 海外に紹介したいという動機から、自分の暮らす地域の情報についても関心が高まった (3) 交流サイトの利用頻度は、もともと使っている内部交流サイトほど活発ではなかった などが明らかになった。SNS 利用が活発でなかった原因としては、システムの使い勝手の難しさや、相手との書き込みタイミングのずれの問題などが示唆された。

キーワード：地域メディア活動、つづきジュニア編集局、国際交流、SNS、NOTA、英語

1 問題意識

今年で 4 年目を迎えた「つづきジュニア編集局（注 1）」は子どもたちの目線で都筑区の魅力を発信していくことを目的とした地域メディア活動である。従来は、子どもたちが地域に向けて情報発信するという活動で、海外と交流したり、インターネットで情報交換したりする機会はなかった。そこで 2012 年度は、日米間交流を支援する非営利団体である JAPAN SOCIETY（注 2）が提供するコミュニケーションサイト「going global」を導入して海外の子どもたちと交流することを提案し、つづきジュニア編集局の活動の幅を広げることを目指した。このような活動は海外の子どもたちに日本のこと、都筑区のことを知ってもらえる良い機会であり、ジュニア記者にとっても、外国の文化への関心、さらに振り返って自らの地域への関心を新たにすることができるよききっかけになると考えられる。

また、子どもたちの国際交流に情報コミュニケーション技術（ICT）を導入した場合、ICT についてのリテラシーの低さが成果に大きく影響を与える場合が多いが、今回、この SNS を紹介するつづきジュニア編集局では、従来から「NOTA（注 3）」という内部コミュニケーションサイトも利用している。こちらは極めて活発に利用されていることから、このサイトの利用と比較することで、SNS を特に国際交流に用いることの効果やそこに

生じる諸問題を明らかにすることができると考えた。

2 先行研究

外国の人びとと国際交流を行うことで、海外への関心や理解を深めるという活動は、小・中・高等学校における総合的学習のテーマとしてもしばしば取り上げられるテーマである。この 20 年ほどの間に技術が飛躍的に発展し、海外との通信を用いたコミュニケーションは極めて低コストで行えるようになった。近年では、オンライン TV 会議やチャットなどを用いてリアルタイムにコミュニケーションを行うことも可能であり、またテキストだけでなく、画像や音声、動画などを活用したコミュニケーションによって言葉の壁がある程度低くすることができるなどのメリットがあり、注目されている。

成瀬（1993）は早くからパソコン通信を利用して、英国北アイルランドにある高校と日本の高校の間で、電子メールを使った交流を行い、そのような国際交流学習が効果的であるためには、目標の設定、生徒にとっての実現性の高さ、長期的な計画、グループ活動などがカギになると指摘している。またその後のインターネットの発展を踏まえた事例の中では、テレビ会議などのマルチメディア、同期的コミュニケーションの利用が、電子メールのみの交流より効果的であること（成瀬・山西・長山、2002）などを示唆している。奥林ら（2011）でも、高校生同士の交流学習の事例で、文章よりも動画の方が繰り返し閲覧され、高校生自身も、「写真を添付したほうが、内容が伝わる」など、マルチメディアを活用した手がかりを高く評価していることが明らかになった。

また小学校などより年齢層の低い子どもたちを対象とした場合には、言葉の壁がより問題になるが、これについては、今後、自動翻訳の機能向上によるコミュニケー

FUJITA Tomoko

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科2012年度卒業生
KATOU Masaaki

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科2012年度卒業生
NAKAMURA Masako

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科教授

ション支援が現実的なレベルになっていくことが期待される。実装はされていないが、このような機能を組み込んだアイデアも試作されている（西田ほか，2002）。

また成田ら（2007）は、途中で翻訳者が介入することによって、人力でこのような言葉の壁を乗り越えようとする試みをしている。彼らの取り組みは日英国際交流サイト「Japan UK Live!」を用いている。このサイトでは小学校1、2年生や中学校での実践事例もあり、学習効果として（1）自国や自分の地域を紹介することで、異文化理解に加えて自分の住む地域の文化の発見、理解につながった（2）英語学習の必要を感じ、意欲が増した（3）国語科や社会科のカリキュラムに取り入れたことで教科の学力向上につながった（中学校の事例）（4）相手と交流するという目的意識が明確であるためコミュニケーション能力や情報モラル、情報機器の操作スキルが自然と身についたという4点を挙げている。このうち、（1）（2）などは成瀬（2004）も高校生を対象とした分析でデータとして示している。

また成瀬ら（2002）は、ネットワークを利用した海外との交流学習の指導者30名にアンケートを取り、彼らから見た課題とその要因について、参加者が30人未満の方が、それ以上の場合より、生徒間の協力が身につくやすいこと、指導者が一人で実践している場合のほうが言葉の壁を大きいと感じており、複数の教師の協力体制や学外からのサポートが重要であることなどを挙げている。

Latour（2005）は、アクターネットワーク論の観点から、社会的なものとは、もともとテクノロジーを含んで一体として成立しており、テクノロジーなどの非人間的な要素をいわゆる「社会」や人間的要素と切り離して考えることはできないとしている。このような観念にたった時、テーマの設定や運営、技術的な問題などがどのように影響しあって実践が成立しているかを検討することが重要だと考えられる。ICTを活用した上述のような活動も、有効に機能するためには、システムの使いやすさのような技術的要素と、コミュニケーション内容や書き込みをするコミュニティのあり方、活動の組織化などの社会的要素が有機的に一つのネットワークとして機能していることが必要である。実際に一定の成果を収めている活動は、意図的にか否かは別として、さまざまな工夫によってそれを実現していると考えられる。本研究ではそのような社会—技術的なネットワークの観点を特に意識しつつ、本取組を考えることとする。

3 目的

本研究では、地域メディア活動に、新しく国際交流を目的としたSNSを取り入れた際の利用状況を、従来から内部向けに使っているコミュニケーションサイトと比

較すること、SNSを用いた国際交流による外国への興味関心の変化を明らかにすることを目的とする。

3.1 going global と NOTA の利用状況の比較

going global は JAPAN SOCIETY における国際交流に使われているサイトである。主に学校での学習に利用することを意図して、交流先相互の教師が中心となって運営するようデザインされている SNS であり、実際の参加事例としては、英語や総合的学習の授業の一環、あるいは有志生徒による放課後のグループでの活動参加などがある。プロジェクトの例として、ビデオによる自己紹介や、生徒たちの地元紹介やディベート、2011年に日本も含め世界各地で観察することができた金環食を扱った交流など、テーマを決めたプロジェクトなどがある。参加する教員や学校は、JAPAN SOCIETY のコーディネータと相談しつつ、自由にプロジェクトをたてることができる。登録者以外には各内容は見えず、書き込みもできないため、児童・生徒の安全にも配慮されている。

今回つづきジュニア編集局は going global で「よこはまレオニアプロジェクト」というプロジェクトに参加し、アメリカのニューヨーク州レオニア地域の子どもたちと交流することになった。

一方、NOTA はブラウザ上で自由にホームページを作ることができるコミュニケーションサイトである。サイトはグループで共有することができ、複数のパソコンから同時にページの編集を行うこともできる。つづきジュニア編集局では、2010年からNOTAを利用しており、ジュニア記者同士や大学生との内部コミュニケーション、取材の連絡などに使われている。

本研究では第一の目的として、going global でのやりとりなどを、NOTA の利用状況と比較し、利用状況を規定する要因を分析する。なお、going global と同様、ここで用いているNOTAもクローズドサイトになっており、関係者以外は閲覧できないようになっている。

3.2 going global を使ったことによる日本や外国への興味の変化

先行研究にもあるように、going global を使って実際に外国在住の子どもと交流をすることにより、外国への興味が一層向上するのではないかと、さらに、日本を外国の子へ紹介することにより、日本や地域への興味も向上するのではないかと、予想した。

4 フィールド概要

「つづきジュニア編集局」全体の概要は本号掲載の守田・實方・中村論文を参照。ここでは、去年までであった企画部、文化部、社会部に加えて新たに設置された国際

表1 各コミュニケーションサイトの特徴

going global	NOTA
写真、動画を投稿することができる	写真を貼ることができる (動画は不可)
話題はスレッドごとに「トピック」になっている	情報は「ページ」として表示。1 ページに複数の話題を入れられる
スレッドごとにコメントを書けるので、元の投稿とコメントの対応がわかりやすい	書き込みとコメントの対応関係は各自の書き方に委ねられている
右の意味の掲示板やアクセスカウンターはない	ページ内に掲示板やアクセスカウンターが付けられる
直接は絵は書けない (画像は投稿可能)	ペンや図形ツールで直接絵が描ける

部を中心に説明する。国際部は going global への参加をきっかけに国際交流に関心がある子どもたちに声をかけることで生まれた。2012 年度のジュニア記者 53 名のうち、国際部に所属した者は 18 名であり、結果的に 4 つの部のうちで最も人数が多かった。2012 年 4 月に行った事前アンケートによれば、回答してくれた 36 名のジュニア記者のうち、20 名は海外に行ったことがあると回答しており、もともとジュニア記者は海外経験が多く、外国の文化にも関心が高い (26 名)。英語に触れる機会がある子どもも多く (28 名)、「日本のことを外国に伝えてみたい」という回答も 32 名とほとんどが「はい」と肯定している。

交流相手となったのは、アメリカニューヨーク州レオニア地区在住の小学生から中学生の年齢段階の子ども 6 名である。前述のように、going global は、もともとは学校間コミュニケーションのためにデザインされた SNS だが、今回は日本側が学校を超えた自主的活動のグループであることから、交流相手も、地域に住む子どもたちが紹介された。なお、6 名の子どもたちの大半は日系であり、日本語は母語ではないが日本語学校にも通い、ある程度読み書きができる。またアメリカ側のコーディネータ役は JAPAN SOCIETY において going global のアメリカ側責任者でもあるロバート・フィッシュ氏夫妻が担った。

5 調査方法と調査の概要

5.1 参与観察

つづきジュニア編集局の子どもが参加した取材、会議、放送局に大学生スタッフ 8 名が同行し、参与観察



図1 取材の様子

JAPAN SOCIETY のロバート・フィッシュさんにインタビュー (著者ら撮影)

を行った。期間は 2012 年 4 月 21 日～12 月 18 日 (会議 7 回、取材 12 回 計 19 回) である。取材のうち、国際部取材と位置づけられたのは、たまたま来日したフィッシュ氏のインタビューおよび都筑区に住む外国人住民らの支援を行う NPO である、つづき区民交流協会が運営する「都筑多文化・青少年交流プラザ (通称マイプラザ)」の取材の 2 件である (他にも候補はあったが 2012 年度中には実現しなかった)。

取材だけでなく、国際部の会議の際に、ジュニア記者が going global を使っている時の会話なども記録としてフィールドノーツを取っている。

5.2 going global 上の観察

国際部の子ども 1 人ひとりのアカウントを作り、アメリカニューヨーク州レオニア地域の子ども 6 名と going global で交流を行った。そこでのやりとりをまとめ、NOTA との比較を行った。ジュニア記者だけでなく、スタッフも書き込みを行った。going global を利用した子どもは国際部 18 名、レオニアの子ども 6 名。1 人当たり書き込み数 6.1 件 (レオニアの子、大学生も含む) (2012 年 5 月 17 日～12 月 21 日)。

5.3 NOTA 上の観察

2010 年から、つづきジュニア編集局の子どもに NOTA の個人ページを作り、そこで交流してもらっているが、そこでのやりとりをまとめ、going global との比較を行った。子ども達の個人のページは自己紹介や掲示板、絵を書いたりなど自由に使ってもらっている。また、個人ページの他に取材の感想を書いてもらうページや、それぞれの部のページもあり、取材についても NOTA を使って連絡を取り合っている。子ども達だけでなく NPO の運営スタッフや大学生も利用している。NOTA を利用した子どもは 53 名中 47 名。1 人当たり

書き込み数 17.2 件 (2012 年 4 月 23 日～12 月 21 日)。

5. 4 アンケート調査

アンケートは事前アンケートと事後アンケートの計 2 回行った。

- (1) 2012 年 4 月 21 日 事前アンケート：回答数 36 名 (うち国際部 11 名)：ジュニア編集局参加者全員に向けて、海外に行ったことがあるか、外国の文化に興味があるか、などを聞いた。
- (2) 2012 年 12 月 16 日 事後アンケート：回答数 27 名 (うち国際部 8 名)：ジュニア編集局参加者全員に向けてのアンケートと国際部の子どもへのアンケートを実施。全員に向けてのアンケートは、NOTA の見る頻度、NOTA を使っていて楽しかったことなどを聞いた。また国際部にのみ質問した部分では、外国への興味が向上したか、国際部でもっとやりたかったこと、楽しかったこと、困ったことなどを聞いた。

5. 5 スタッフインタビュー

2012 年 12 月 16 日クリスマス会終了後、1 時間程度つづきジュニア編集局を運営している NPO スタッフ 2 名に、国際部のあり方、SNS を今後どう使っていくかなどをインタビューした。

6 結果

6. 1 going global と NOTA の利用状況の比較

going global の更新状況は、1 人当たり書き込み数 6.1 件、NOTA の更新状況は、1 人当たり書き込み数 17.2 件である。

going global の話題は、文化のことや学校のこと、おしゃれについてなどである。テキストだけでなく、話題についての写真を投稿したり、ビデオで自己紹介や日本で流行っている遊びを投稿した。レオニアの子どもたちからもビデオで地域のお祭りの様子が投稿された。基本的にやりとりは日本語で行ったが、出来る子は英語でのやりとりも行った (図 4)。NOTA は自己紹介や取材のことなど、自由に書き込みをしている。また、図形やペンツールがあるため、絵や記号を出してページを飾り付けて使っている子もいる。掲示板やカウンターの設置をしている子どもも多い。

going global は 5 月 20 日の国際部会議で初めて紹介され、その日は 18 回書き込みがされた。子どもたちはその日に初めて going global を使用したが、学生スタッフのフィールドノートには「サイトにアップ出来るパソコンが 2 つしかなかったので、待っている国際部 A の子達は自分たちでビデオを撮っていたり、それぞれに楽

しんでいた。(5 月 20 日 藤田 FN 国際部会議)」と記録され、子どもたちが非常に興味を持ち、興奮して取り組んだこと、またすでにビデオレターを撮って送ろうとしていたことが分かる。

子どもたちの反応がよかったことから当初は従来からある NOTA サイトと同様に、自宅からも子どもたちが自発的にアクセスして利用してくれることを期待し、国際部のメンバーには一人ひとり個別にアカウントを作成したが、その後、going global は思ったほど活発に使われなかった。

とくに 8 月は書き込みゼロだった。レオニアからの書き込みもなかった。9 月は全体会議が行なわれ、その際に希望者は残って書込したため、投稿が増えている。しかし 10 月、11 月はまた全体会議が行われなかったため減少した。12 月はクリスマス会が行われたが、その時、レオニアからの投稿があり、それを知ってクリスマス会が終わった後にその場で書き込みをしてくれる子どももいた。その日から書き込みが少し増えた。

NOTA では会合がなくても一定量のコミュニケーションが行われているのに対して、会議がない週の書き込みが極端に少ないことが分かる (図 2, 3 参照)。

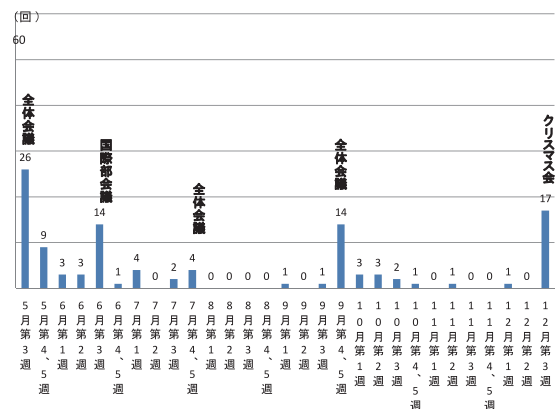


図2 週ごとのgoing globalの書き込み件数

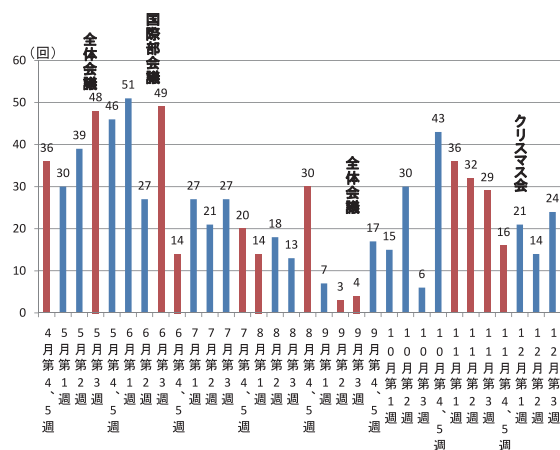


図3 週ごとのNOTAの書き込み件数



図4 going globalでの英語のやりとりの例 (個人名はマスキングしてある. 図5も同じ)



図5 NOTAでのやりとりの例

これらの経過から、大学生がある程度促せば書き込みの回数が増えること、また会議場面でみんなと一緒に書き込む機会を作らなければ、その後の書き込みが減少することが分かった。

既に述べたように、going global と NOTA の更新状況を比べると、going global は 1 人当たり書き込み数 6.1 件、NOTA は 17.2 件と going global の書き込み数が少ないことが分かった (書き込み件数は参加人数調整済み)。なぜ going global の書き込み数が少ないのか、考えられる原因を挙げる。

(1) レスポンスの遅れ

KM さん (小 5 女子) と OE さん (小 4 女子) は 7 月 19 日に NOTA 上でレオニアの子どもからの返信を待っているというやり取りを交わしていた。その後、レオニアの子は 2 人の質問に対して 9 月 26 日に返信を

したが、それに対しての OE さんの返信は 9 月 30 日と早い。また、事後アンケートで「going global を使っていて不満や困ったことがありますか」という設問に対し、「レオニアの子からの返信が少なかった」という回答があった。これらのことから、日本側の子どもたちは、相手との投稿のやり取りをもっとしたかったが返事が少なかったり、遅れたりしたことが阻害要因だったと考えられる。これについては、レオニア地区の子どもたちは 6 名と参加者が少なく、また普段、日本側の子どもたちのように一緒に特定の活動をしているわけでもなかったため、一緒に記入するチャンスが少なかったことが原因と思われる。送られたレオニアからの投稿を見る限り、記入した時には彼らも楽しんでいただようである。

(2) 操作、アクセスの難しさ

国際部の会議で going global を使う際に、学生スタッフは国際部の記者から毎回のようアクセスの仕方、操作などの質問を受けた。フィールドノートに記録された発言でも、例えば 8 月 3 日のつぎマイプラザ取材の際、KS さん (高 3 女子)、TM さん (小 5 女子) が going global について「使い方が良く分からない」「使いづらい」という発言をしていた。

また、2012 年 12 月 16 日のクリスマス会で実施したインタビュー、参与観察において、数名の小学生から「パスワードも忘れたし、家では見ない」「going global への行き方が分からない」、あるいは、「どうやって返信したらいいですか?」「画像の載せ方が分かりません」といった使い勝手に関する質問があった。これらは NOTA を使用するときにはあまり出てこない質問である。

また事後アンケートでは、「going global を使っていて不満や困ったことはありますか」という設問に対し、「使い方が難しかった、サイトへの行き方が分からなかった」という回答が一番多かった。

6. 2 going global を使ったことによる日本や外国への興味の変化

事前アンケートでも、国際部の子全員が外国への興味がある、と答えていたが、事後アンケートでも、「日本への興味以前より高くなったか、外国への興味以前より高くなったか」の設問に対し、回答した 8 名は全員が高くなったと回答した。また、国際部の活動でもっとやりたかったことを聞いたところ、「外国のことをもっと知りたかった」とともに「going global をもっとやりたかった」「もっと国際部の取材に行きたい」という意見が出た。

going global のやりとりでは、国際部の子どもたちが外国のことについて知りたいことを質問するだけではな

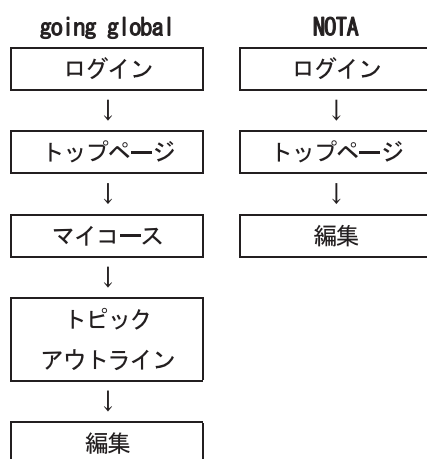
く、日本の事を紹介している書き込みも見られた。KSさん（高3女子）はレオニアの子どもたちに自分がしている日本固有の習い事（お茶や日本舞踊）を紹介していた。これに対しては、レオニアの子どもたちも、地域のお祭りやアメリカ特有の行事（サンクスギビングデー）を紹介しており、お互いに地域についての情報発信を行ない、感想を述べ合う様子が観察された。

7 考察

7.1 going global と NOTA の利用状況の比較

NOTA はツールボタンがあり、投稿したいページへ行き、そこを押せば文字や図形が投稿できるようになっている。一方、going global はトップページから、自分の所属しているプロジェクトをクリックし、トピックを追加する、をクリックし、投稿ボタンを押す、という複雑さがある（表2）。

表2 アクセスから書き込みまでのステップ数



そのことから使い方が分からず、家からの書き込みが増えなかったのではないかと考えられる。また、NOTAのトップページにgoing globalへのリンクを貼ったところ、家からの書き込みが増えたということから、サイトへの行き方が分からないために会議の時しか更新が増えなかったのではないかと考えられる。

レスポンスの遅れ、ということもgoing globalが盛り上がりなかった原因の一つではないかと考えられるが、それよりも操作の難しさ、アクセスの難しさが大きな要因なのではないかと考える。また途中で飽きてしまったのではないかと、という疑問については事後アンケートやインタビューから興味を持続していることが確認された。

7.2 going global を使ったことによる日本や外国への興味の変化

国際部の子は、元々外国への興味はあるが、実際に外

国の子と交流をすることにより、文化や習慣などの違いが分かり興味が向上した。さらに、外国の子へ日本の文化を紹介することにより、外国だけではなく日本への興味も向上したのではないかと考える。

小学生の子どもたちが、学校で流行している遊びや、好きなお菓子、アイドルのことなどを紹介しているやり取りが多く見られた。外国では何が子どもたちの間で人気があるのか興味があるようだった。一方高校生の子は日本の文化や習慣を紹介していた。外国の文化や習慣に興味があるようだった。このように子どもたちの学年によって興味は異なるが、小学生でも普段外国の人に聞けないようなことを質問できるので、外国の文化や生活について知ることのできる良い機会となった。インターネットを使えば外国のことを知ることができるが、地方の学校で流行っていることやお祭りなどは知ることができない。そのような細かい外国のことについて知ることができるのがgoing globalの魅力の一つになっているのではないかと考える。

7.3 国際交流学習への含意

多くの先行研究事例と異なり、今回の取組は学校教育という枠組みの外で行われる取り組みだった。このため、やりやすかった面と、逆に難しかった面がある。

今後に向けた含意ということで、何点か上げていこう。まず、コミュニケーション内容について、事前にきっちり打ち合わせて始めるのではなく、子どもたちの自発的関心に合わせたコミュニケーションをすることができたのはメリットといえるだろう。子どもたちはアンケートや会話からも分かるように、アメリカの子どもたちとのコミュニケーションを大変楽しんでいた。

次に言葉の壁についてだが、今回going globalの参加者は日米とも小学生が中心であり、特に日本の子どもたちは、英語で文章を書くことにはあまり慣れていない。これについては、日本側スタッフの間でも事前に相談して、子どもたちが英語を書く前に、NOTA上で、英語の得意なスタッフ（共催しているNPOのメンバー）にチェックとアドバイスをしてもらおう、という体制を用意した。しかし始めて見ると、学校的な「指導」にならずに進めるのは難しく、また英語でとなると、子どもたちに構えが生まれて間違え書き込みが抑制されたり、やり始めたところで難しくなって書きかけの下書きを削除してしまう、という例が見られた。このため、途中からは無理に英語にせず、日本語で書いて大丈夫、と勧めるようにした。

レオニアの側に日系の子どもたちがいるため、ある程度日本語が読めること、読めない子にも、読める子や大人スタッフ（JAPAN SOCIETYスタッフ）が説明してあげるといことで、大きな問題は生じなかった。

むしろアメリカ側スタッフによれば、今までどちらかと言うと日本語学校に「行かされている」といった感覚で日本語の勉強に熱心でなかった日系の子どもが、日本の子どもとのコミュニケーションをしたいために、熱心に勉強するようになったとのコメントがあった。

今回の「日本語で」というやり方は、学校教育現場と異なり、英語をサポートできるスタッフが不足しているという自主的活動ならでは状況からくる苦肉の策でもあったが、国際交流を考える上で、コミュニケーションの相手として海外の日本語学校をもっと活用することがお互いにとって有効であることを示唆している。

8 提言

今回の実践から、外国の子どもグループとの SNS での交流によって、外国や自国、あるいは自分の暮らす地域への興味関心が向上することが確認された。今後は、国際部以外の子どもたちも、内部だけで交流している NOTA だけではなく、他団体と交流ができる SNS を提供することが望ましい。

また今年はレオニアの子どもたちだけと交流したが、レオニアだけでなく他の団体と交流することも必要である。8 月には going global での交流は 0 回だった。アメリカの場合は、夏が年度の変わり目であることもあって、長期休暇にはいつて連絡が途絶えたのもやむをえないかもしれない。時間的な調整のしやすさを考えると、外国だけではなく国内で同じような地域メディア活動をしている団体とやり取りをすることも面白いかもしれない。

いずれにせよ、ジュニア編集局の長期的な継続のためにも、次々に新しいことに挑戦していく必要がある。その一つとして都筑区限定ではなく範囲を広げ、色々な地域での取材をするということも子ども達の興味を広げるきっかけになるのではないかと考える。

謝辞

本研究にご協力いただいた NPO 法人ミニシティ・プラスの皆様、取材先の皆様、ジュニア記者の皆様、ジュニア記者の保護者の皆様、また JAPAN SOCIETY の皆様に心より御礼申し上げます。

注釈

(注 1) つづきジュニア編集局の活動については、本号掲載の守田・實方・中村論文を参照のこと。

(注 2) JAPAN SOCIETY は、日米両国民の相互理解を目的に著名な日米財界人らによって 1907 年に設立された NPO 団体である。国際関係事業、芸術文化事業のほか、教育事業の 1 つとして学校教育プログラムを行なっている。going

global はその一環として、もともとは学校間交流のために作られたサイトである。現在、その活性化と有効な実施方法を探る試行を続けており、その一環として、今回の交流が行われた。

ジャパン・ソサエティ概要 (日本語版)

<http://www.japansociety.org/resources/content/9/7/8/documents/JS%20General%20Brochure-japanese.pdf>

(注 3) NOTA については下記サイトを参照。

<http://nota.jp/ja/>

参考文献

- [1] Bruno Latour (2005) Reassembling the Social, Oxford University Press
- [2] 成田健之介・Heidi Potter・堀田龍也 (2007) 「4A3 国際交流サイトを活用した交流学习における学習効果の検討」共同学習・交流学习, 日本教育情報学会第 23 回年会) 年会論文集 (23), 258-259
- [3] 成瀬喜則 (1993) 「国際パソコン通信利用による学校間プロジェクト: Japan Festival 教育プログラムを通じて」『教育情報研究』8 (3), 54-63
- [4] 成瀬喜則・山西潤一・長山昌子 (2002) 「ネットワークを利用した海外との交流学习に関する考察」『教育情報研究』18 (3), 3-9
- [5] 成瀬喜則 (2004) 「地域理解を目的とした英国とのテレビ会議交流学习」『教育情報研究』20 (2), 27-35 2004-09-30
- [6] 西田裕一・松原行宏・山崎敏範・Wilson J.R. (2002) 「日英間の小学校における国際交流支援システムに関する基礎的研究」『電子情報通信学会技術研究報告, ET, 教育工学』101 (706), 209-214
- [7] 奥林泰一郎・中澤明子 (2011) 「国際交流学习におけるマルチメディア利用とその課題-高校生へのアンケート調査から」『大阪大学教育学年報』(16), 163-171

関連サイト

- [1] つづきジュニア編集局
<http://junior.minicity-plus.jp/>
- [2] going global <http://goingglobalsns.org/>
- [3] JAPAN SOCIETY <http://www.japansociety.org/>